

## 報告

# 京都文教大学グリーンケアトポス Co \*はこ

## 「21年8月～22年9月」活動報告

倉西宏・山岸正明・戸田富美子・小西愛永・大塚佑哉・小栗優・倉本咲良・中本経子・椎原奈美江

### 1. はじめに

2021年8月から、京都文教大学グリーンケアトポス Co \*はこの活動を開始し、この報告を執筆している時点で1年2か月が経過した。ここでこの1年間強の活動報告を行いたい。ここでは参加者数を中心に数字のデータを提示する。ここではその情報を報告として行うことが目的であるため、簡単な考察程度、または数字の提示のみとして詳細な考察は加えない。今後毎年の活動報告を行う予定である。なお、Co \*はこの活動紹介については倉西（2022）で報告を行ったので、ここでは詳細には触れない。次年度にはより詳細に検討を行う予定である。

### 2. 2021年8月から2022年9月の活動報告と件数報告

#### (1) 活動全体の件数報告

約1年間で合計26回の死別体験をわかちあう会を行った。男女別の参加者数が以下の表1である。立ち上げて1年で、一定数の参加者が見られており、そういった意味での成果は挙げていると思われる。逆に参加者数が想定を超えており、もともと検討していたよりも早く、対象者別のグループを立ち上げることになった。以下に全体の参加人数とその男女者数（表1）、各グループの平均参加者数・平均年齢・死別経過月数・死因（表2）を示す。

表1 全グループにおける合計参加人数（26回実施）

	参加人数	参加のべ人数
合計	68	200
女性	55	137
男性	13	63

表2 各グループ（G）の平均参加者数・平均年齢・死別経過月数・死因

	平均参加者数	平均年齢	死別経過月数	参加者実数	死因							未回答（不明）
					病気	老衰	自死	事故	事件	災害	その他（不明含む）	
どなたでも可能 G	8.36	63.34	19.74	29	27	1	2	2	1	0	2	10
配偶者 G	9.67	64.59	36.18	27	22	1	1	0	0	0	2	1
お子様 G (21年度)	4.33	64.56	20.72	9	7	0	1	1	0	0	0	0
18歳以上の お子様 G (22年度)	4.33	68.00	21.17	8	4	0	3	0	0	0	0	1

参加人数は実数のことで、一人が何回参加しても「1」とカウントした数である。のべ参加人数は毎回の参加者数を合計した数である。男性よりも女性の方が多いため、継続参加の割合は男性の方が高い状況になっている。ただ、立ち上げて1年強でのべ人数で200人の参加を果たしたことは極めて意義があったように感じている。

参加者の平均年齢が60歳以上となっている。分布で言えば60歳以下の方もおられるが、70代、80代の参加者も多くこの平均年齢になっている。高齢の方が死別体験に遭遇しやすいということはもちろんだが、広報が地域生活紙や新聞社から行ったところも影響していると考えられる。

また、どなたでも参加できるグループと他の特定の対象が定められているグループの両方に参加している人もいるため、重なりがあることは記載しておきたい（そのため、表1の人数と数字が合致しないところもある）。

死因については病气中心であるが、子どもを亡くしたグループでは自死も他のグループより多い。

## (2) どなたでも参加可能なグループ (2021年8月～2022年9月)

死別体験がある人ならばどなたでも参加可能なグループの参加人数等を示す（表3）。

表3 どなたでも参加可能グループの参加人数  
(14回実施)

	参加のべ 人数	平均参加 人数	最大参加 人数	最小参加 人数
合計	117	8.36	21	2
女性	81	5.79	19	1
男性	36	2.57	4	0

立ち上げる前の時点では、死別体験がある方であればどなたでも参加可能なこのグループの

みをまずは細々と続けていくことになると考えていた。しかし、広報をしっかりと行ったことから、想定以上の参加者にご参加いただいた。そのため、年度の途中から特定の対象のみの活動も別途実施していくこととした。それが以下に記載の活動である。

## (3) 配偶者を亡くされた方のみのグループ (2021年11月～2022年9月)

配偶者を亡くされた人のみのグループの参加人数等を示す（表4）。

表4 配偶者を亡くされた方のみのグループの参加人数  
(6回実施)

	参加のべ 人数	平均参加 人数	最小参加 人数	最大参加 人数
合計	58	9.67	7	12
女性	43	7.17	5	9
男性	15	2.50	1	4

## (4) 子ども（年齢の区分無し）を亡くされた方のグループ (2021年11月～2022年3月)

子ども（年齢区分無し）を亡くされた人のみのグループの参加人数を示す（表5）。

表5 お子さまを亡くされた方のみのグループの参加人数  
(3回実施)

	参加のべ 人数	平均参加 人数	最小参加 人数	最大参加 人数
合計	13	4.33	2	6
女性	6	2.00	2	2
男性	7	2.33	0	4

## (5) 18歳以上（高校を終えられて以降を目安） の子どもを亡くされた方のみのグループ (2022年4月～9月)

18歳以上の子どもを亡くされた人のみのグループの参加人数を示す（表6）。

表6 18歳以上のお子さまを亡くされた方のみのグループの参加人数 (3回実施)

	参加のべ 人数	平均参加 人数	最小参加 人数	最大参加 人数
合計	12	4.00	3	5
女性	7	2.33	2	3
男性	5	1.67	1	2

### (6) 18歳以下（高校生までを目安）のお子様を亡くされた方のみのグループ

2022年度から開催しているが、こちらのグループへの参加者はこの報告時点では0名となっている。2021年度に18歳以下の子どもを亡くした参加者が2名おられた。成人後の子どもを亡くす体験と未成年時の子どもを亡くす体験には差異が存在することが考えられ、分けて実施することとしたが、報告時点では参加者が見られていない。マンパワーの問題も考えると継続して0名が続いた場合は、次年度の当該グループの実施について検討が必要であると考えている。

## 3. 開始前の広報活動の詳細について

### (1) 有料広告

地域新聞である「京都市リビング新聞社」への有料広告を行った。2021年8月開始に合わせて、2021年7月と8月の2回に分けて行った。さらに2022年の春には、子どもグループへの参加を促すことを目的として再度「京都市リビング新聞社」への有料広告を行った。

### (2) 新聞社への報道依頼

「(1)」の2021年度7,8月の有料広告のタイピングに合わせて、各種新聞社に対して報道依頼を行った。その中で「京都新聞社」から取材を行っていただき、代表者のカラー写真入りで掲載いただいた。「(1)」の有料広告に加えて新

聞社の内容を目にすることで参加の決断を行ったという参加者も複数おられた（後述）。

### (3) ホームページの作成

Googleでは無料で簡単に作成できるホームページのフォーマットがある。それを用いてホームページを作成した。当初はここから来られる人は少なかったが、2022年度に入ると新規の方の半数以上はホームページを見ての参加となっている。簡易のホームページでも一定の効果があるため、有料のよりしっかりとしたホームページを作ることで、より会を探している人の目に留まりやすくなるだろう。つまり、探している人はたくさんいるが、その人たちが見つけやすい工夫を行うというイメージで広報を行う必要があるだろう。

ホームページ URL :

<https://sites.google.com/po.kbu.ac.jp/cohako>

### (4) 関西遺族会ネットワークへの掲載

これは関西限定であるが、「関西遺族会ネットワーク」という団体があり、そのホームページでは関西圏の遺族会やグリーンケア活動を行っている団体の情報が集約されている。そこに当団体も掲載してもらっている。

### (5) SNS

現在はTwitterのみであるが、活動日程の案内、また当団体の活動などの紹介を行っている。他のSNSについても検討を行っており、またSNSだけではなく、動画での情報発信の有効性も検討したいと考えている。

### (6) 今後の広報活動について

今後は、葬儀社へのご案内、各保健所や地域支援活動を行っている団体への情報提供を行うということを考えている。様々な広報活動を

表7 「京都文教大学グリーフケアトポス Co \*はこ」をどこで知ったか (複数回答)

リビング京 都新聞社	新聞社	Co *はこ HP	Twitter	関西遺族会 ネットワーク	その他	知人	保健所	自身のカウ ンセラー	不明 (未回答含)
31	13	15	1	1	12	3	1	2	3

行つての実感としては、広報活動を行えば行くほど、しっかりとそのリアクションがあるということである。広報活動によって必要な人に必要な情報が行き渡り、さらにその上でその団体の信頼性があれば、参加に至るということになるのだらうと思われる。グリーフケア活動を広げていくには積極的な広報活動が今後は欠かせないと考えられる。

#### 4. 「京都文教大学グリーフケアトポス Co \*はこ」をどこで知ったか

ここではCo \*はこにどのようにしてたどり着いたか、どのようにして知ったかについて報告を行う。参加者がどういった経路で参加に至ったのか、以下にまとめたが(表7)、「3.」の内容も踏まえて見ていただきたい。回答は一人につき複数回答されている場合もあった。

当初はリビング京都と京都新聞の両方を見たことで参加してみようと思えたという参加者が複数見られた。この二つが相乗効果を生み、初回参加者が想定以上の規模(21名の参加者)となった。これは完全に筆者らの問題であるのだが、21名もの参加者にご参加いただいた際の対応準備ができておらず、それぞれの方に一定の満足をいただくような時間を提供ができなかった(むしろ「0名」であることの可能性の方を想定していたぐらいであった)。強い期待や思いを持ってご参加いただいた方々に本当に申し訳ない思いであった。このことを反省として、特定の対象を絞った形でのグループを準備することで、人数が分散されることを期待し、そしてそれぞれのグループにおいても一定人数

を超える場合は2グループに分ける工夫を行った。それに伴いスタッフの必要数も増し、一つの課題となっている。

22年度以降になると当団体のホームページからが増し、保健所やカウンセラーといった専門家からの紹介のケースも散見されるようになった。また、代表者の研究室の電話番号とメールアドレスを連絡先として公開しており、そこに直接問い合わせをされる方も多数おられる。初参加の方の半数以上は問い合わせをいただいた上での参加となっている。

これらのことから、団体の広報というのは、必要な方へ情報を届けるという意味だけでなく、団体の信頼性にも影響が生じる。さらにこの団体の信頼性をいかに高めるかという点の重要性と、メールや電話等の直接アプローチを行うことで参加へのワンクッションがあるということも重要であることが考えられる。また、高齢の方の参加においてはお電話をいただいた上で来談される場合も多い。そのため、連絡先としてメールアドレスだけではなく電話を設定しておく意義はまだ残っていると思われる。なお筆者の研究室の番号を公開しているが、不在の場合も多く留守番電話の設定しておき、電話番号を留守電に残してもらうようにしている。そして折り返し代表者からお電話をかけて詳細の説明等を行っている。

#### 5. 2022年11月以降の活動：ニーズに合わせた活動拡大の模索

これまでのグループにおけるグリーフケアの課題の一つとして、各活動団体が特定の対象の

みを扱う活動しか行っていない場合がある点である。自助グループにおいては、立ち上げを行う方自身が同じような経験をされ、そこから自身と同じような立場の他の遺族をもサポートしようと考えて立ち上げられるところが多いように思われる。それは極めて重要な活動で、グリーンケア活動が全く広がらない現状においては、このような一つ一つの活動こそ重要であるように思われる。ただ、そういった特定の対象への援助のみが点在する現状に課題があるように思われる。つまり、それぞれがより援助する対象の幅を広げていくことが重要だろう。マンパワーや予算的な問題もあり容易いことではないが、Co \*はここにおいてはその点を意識して活動を継続していきたいと考えている。またニーズという意味では参加される方がおられる限りは開催していくが、広報を行った上でも継続して参加者がおられない場合はそのグループを閉じることも視野に入れることも重要だと考えている。限られたマンパワーと予算をどのように使うかは強い葛藤を強いられる。1人でも利用者が存在する場合は必ずそこを守っていく必要はあるのだが、もし全く参加者が無い場合は、広報についての検討を行った上で、そのグループを閉じるという選択肢も検討の中に入れる必要はあると考えている。

## 6. 京都文教大学臨床物語学研究センター主催の講演会への協力

2022年度の臨床物語学研究センター主催のシンポジウムにおいて、Co \*はこが「協力」の位置づけでお手伝いを行った。「境界性の図像：九相図に表現される、あわい」というシンポジウムで、Co \*はこの代表者である倉西がシンポジストとして登壇し「臨床心理学からみる九相図～「みる」ことと「表面」という観点

から～」と題した講演を行い司会進行等も担った。また受付等の手伝いに他のスタッフが協力を行った（なおCo \*はこ代表者の倉西は臨床物語学研究センター所員でもある）。

今後はCo \*はこ単独での研修会や講演会の実施を検討していきたいと思っている。

## 7. 2023年度の活動：遺児と保護者へのナラティブをベースとしたグリーンケアプログラム

2023年度からは表題の小学生遺児とその保護者へのプログラムの実施を予定している。科研費による研究として行うものであるが、Co \*はこの運営団体として「臨床喪失学研究会」という名称の研究会活動の一環としてプログラム内容などの準備を進めている。22年度末ごろから参加者の募集を行い、23年度の春4、5月ごろにはインテイクを行い、6月～夏休み辺りの期間から実施予定である。

## 8. おわりに

21年8月～22年9月末までの活動報告を行った。当紀要の締め切りが9月末ということもあり、今後も毎年この区切りで活動報告を行っていく予定である。次年度は活動開始2、3年経過ということで、活動全体に対しての一定の考察や検討をより深く行う予定である。

今後も活動の質の向上、幅や量の向上を意識し、持続可能な団体としての安定性をいかに確保できるか模索していきたい。

なお、以下に連絡先を記載するので、何かあればいつでも問い合わせ下さい。

連絡先：京都文教大学臨床心理学部／京都文教大学グリーンケアトボス Co \*はこ  
倉西宏

メールアドレス：h-kuranishi@po.kbu.ac.jp

電話番号：0774-25-2512（倉西の研究室の電話。着信履歴が残らないので留守番電話に電話番号を残していただくようお願いします。）